

南大隅町の住民から、地域の魅力を聞く東京農業大学の学生(前列中央)
—南大隅町根占川北

東京農大生、南大隅訪問

温かい田舎先輩に学ぶ

交流四半世紀OG移住も

南大隅町の住民と、東京農業大学の学生が交流を続けて四半世紀余になる。1996年に、農家ら有志が合宿を受け入れて以来、毎年のように学生が訪問。気に入って移住した卒業生もあり、今ではまちづくりの中心的存在だ。学生たちは「人が温かい」「地域の支え合いが密」といった先輩の生の声を聞きながら、「田舎暮らし」の現状を深く学んでいる。



交流のきっかけをつくった卒業生の梅木涼子さん(47)＝福岡県出身＝は、98年に町に移住した。2019年にNPO法人「風と土の学び舎」を立ち上げ、まちづくりに力を入れている。

梅木さん自身も所属した東京農大のサークル「アジア・アフリカ研究会」のメンバーらが毎年のように南大隅を訪れている。今年は学生5人が1月下旬から2週間ほど滞在し、農家の収穫を手伝うなどした。

2月3日夜には、住民ら10人と学生が語る会を実施。昨春移住したOG

の中川夏帆さん(23)＝福島県出身＝が司会を務め、「地域で暮らすこと」をテーマに話し合った。住民は「野菜や果物の物々交換が盛んで、食べ物に困らない」「住民同士の関係性が密なので、それが苦手な人もいるかも」などと、地元ならではの日常を紹介した。

2年生の大嶺海乃さん(20)は「風土、文化、人を理解すれば、地域で暮らしていけると思った。交流ができて良かった」と語った。

(永井貴士)